

ひまわりからの

メッセージ

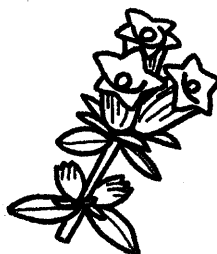
54号

2015.10.19

西濃園域
発達障がい支援センター
ひまわり

発行人：中野たみ子

啓示



私の不注意で背柱の十二番目を圧迫骨折し、多くの皆様にご心配とご迷惑をおかけしてしまいました。

ひまわり学園が肢体不自由のお子さんの通園施設だった頃、子どもたちの訓練や介助にかかわった私でしたが、いや自分が動けなくなった時、実に多くのことを知ることになりました。

寝返る時に足まじの角度に曲げたり寝返りしやすいか、座位から立位する時にどんな支えがあれば立ち上がりやすいのか、方向を変える時にどの様な腰の回旋が必要なのか等々体の動きに対して自ら検証することにもなりました。

そして、介護される側として、あと五センチ手前に置いてもらうたり、お茶に手が届くのととか、この重さは今の私には持てないのだけとか、もどかしさもありましたし、職場では、いつ、誰に、どのように助けを求めたいのかと迷いました。そして、私がかかわった脳性まひの子ども達や筋ジストロフィーの子ども達も日々、自分の思いを口に出せずに胸内に吞み込んでいたに違いないと思っただけでした。そして、このことが私への啓示なのだと思われされたのです。

私が転んで骨折したのは、A小学校の廊下でしたが、心配して下さった先生や生徒さんに、本当にご迷惑をおかけしてしまいました。その時、起き上がれない私に、一人の生徒さんが、何か白い袋のような物を差し出して、「これを枕にするといいよ。」と言ってくれました。後で聞き知ったのは、その生徒さんは情緒学級に在籍している生徒さんだったとのことですが、その心づかいと、その生徒さんの心配そうな表情が私に安らぎと手えてくれました。そしてその子を青くんが来られたご家庭や先生方のあたたかさを感じたのでした。ありがとうございました。

Respect Education

リスペクト

エデュケーション



先日、金子書房から出ていた『発達障害のある子の自立に向けた支援』という本を読みました。梅森雄二先生が「特別支援教育を受けていない世代の学齢期」という章の中で、リスペクトエデュケーションについて書かれていたので、紹介しておきます。

ご存知のように、発達障害者支援法が平成十七年に成立し、十九年から特別支援教育が実施されるようになりました。しかし、一人ひとりの教育的ニーズと、その支援となると、容易ではないというのが現実であるかもしれません。特別支援教育が少しずつ広がって、子どもたちへ必要な支援がされるようになっていくことを望んでいます。家族や保育者、教育者、児童生徒が正しい理解をしていくことが、まず第一歩と言えるのではないだろうか。

けれども、発達障がいの子どもたちは、わがままや自分勝手に見えるし、ちょっと変わった子とか不思議な子とか見られがちです。もしかしたら、周囲を困らせる子というふうな方をされているかもしれません。そのために、他の子から浮いてしまったり、いじめの対象になってしまったりとも多々あります。

梅森先生は、発達障害とはどういうものかということも、具体的に子ども達にわかるような範囲で知らせていく必要があること、その際に、障害というよりは独特の個性をもっていて、発達障害者の中には発達障がいがある故にすばらしい業績を成しとげた人たちがいるというリスペクトエデュケーションを行うべきであるとして、いじめにあったいた米国の女児のケースを紹介されています。

「ある米国の小学校で、教室でいじめられていたアスペルガー症候群の女児に対するいじめ対策のために専門のセラピストを派遣してもらったことになった。このセラピストは、一枚のDVDを子どもたちに見せた。

そのDVDの冒頭では、サッカーに興じる小学生たちの

シーンが映し出されていた。その後カメラは横に移動しサッカー少年たちに背を向けて座っている男児を映し出していた。その男児はふと目の前の木を見上げると、木から落ちてきたリングをさっさと右手でつかんだのだ。その後映像は、二三歳位の男の子が目の前のピアノを華麗に弾くシーンがあつて、二人の少年は「ほくは自閉症スペクトラム症をもっているんだ。アイゼック・ニュートン、アズテック・ス・モーツァルト」と言うのである。

そのDVDを見ていたクラスの子どもたちは、振り返って教室の後に提示されている偉人たちの肖像画を食い入るように見つめていた。

そして、DVDは、現在のアスペルガー症候群の子どもたちを映し出す。「僕は場の空気が読めないと言われるんだ」「僕はいつも変わっているって言われていじめられるんだ」「僕は自分勝手にわがままって言われるんだ」「など、それぞれが自分の学校での状況を説明しはじめると、クラス全体がざわざわし始め、今までいじめていた女児について友だちと話し始めるのである。

「おいおい、あいつさういえば地図を全部暗記して

たよない」「さうさう、カレンターの曜日はずぐに答えられるんだよ」「ひょっとして、あいつ、ニュートンやモーツァルトみたいに天才なの？」

DVDは、それだけの短いものであったが、見終わった児童たちは、今までいじめていたアスペルガー症候群の女児がひょっとしたら将来天才になるかもしれないと考え、尊敬するようになって、いじめが消失したのである。

この方法がリスペクトエデュケーションという方法であり、発達障害児についての理解教育は、いじめを防ぐ有効な方法の一つである。」(以上、原文)

発達障がい児の多くは、発達のアンバランスさをもっていることが多く、私が最初に出会った自閉症の少年は、過去の「何年何月何日は、何曜日であるか」を、即座に言い当てることができず、三歳のSちゃんは一度行った道は必ず憶えているという記憶の持ち主でした。でも私達はややもすると、「彼は歴史に関しての知識はすごいんです。でも、皆と同じ行動かと

れないんです。」と、出来ない所に視点をもっていくことが多いように思います。本人が好きなこと、興味をもっていることを認め、モチベーションをあげていく工夫は必要だと思えます。私の教え子には、地学が得意な子や歴史が得意な子など、色々ありますが、最後にクイズをやるか、〇〇をがんばろうか、と言うと、はりきってやる子もいます。本人がやる気もおこすにはどうすればいいのかが工夫のしどころでしょう。出来ないことばかり突まうけられたり、やる気も失せ、自尊心感情なども持ちようもないですね。

ちょっと話はそれますが、私の高校三年の時の担任の先生は社会科の先生でした。新卒ではありませんでしたが、先生になられて、まだ数年しか経っていらっしゃらなかったと思えますが生徒の方は、先生をも負かさうと、毎時間質問をするわけです。若い先生は、生徒の質問にきちんと答えようと下調べをされる。でも生徒の方は、その上手をいこうとする……今も健在でいらっしゃるN先生は、「あの時は君算のおかげで必死で調べたものだよ」と今でも笑って話しておっしゃ

るのですが、私は、そういう先生の姿から多くを学ばせていたのだなあと思えます。真摯に生徒に**対**われる姿から人の生き方を教えられたと思うのです。私は決してまじめな生徒ではなかったのですが、「君のあの一言は痛かったよ」と、もうすっかり忘れてしまっていたことは言われて赤面したこともありましたが、信頼し合える師弟の間柄とはそういうものではないかと思うのです。そこには、単に教科を教えるというだけでは、人と人のつながりがあるのだと……。

そんなふうになると、発達のアンバランスをもつ子どもたちはどう寄り添うのか、子どもたちから学ぶことも多いのではないだろうか。

相手の気持ちかわからない子、乱暴な子、みんなと一緒にやろうとしない子、折り合いがつけられない子算々ときめつけずに、逆に私たちが、「できて当然」と思っていることの中に、「本当は人一倍努力している姿があるのかも知れない」と考えてみることも周りの大人として必要なことかも知れません。



二次障害って

どういうこと？



過日、ある研修会で「二次障害って、具体的にどういうことですか？」とたずねられ、もしかしたら、二次障害になっている子どもたちの状態も、二次障害とはとらえられていないのではないかと……と、ふと疑問がわきました。

二次障害というのは、一般的には、本来の発達障害の特性に対して、適切な支援がなされていないか、あるいは不適切な対応がされた結果生じる情緒や行動面の問題のことを言います。つまり、二次障害は突然おきたものではなく、乳幼児期からの適切な支援がなされてこなかった結果生じてくるものです。

二次障害を内在化と外在化に分けて考える人達もあり、内在化障害は、不安、気分の落ち込み、対人恐怖、強迫症状、ひきこもりなど内面的な苦痛

を生じるもの。外在化障害は、極端な反抗、暴力、反社会的犯罪行為など他者に向けた行動上の問題として生じると考えられます。

成人になって、こういった症状を呈する場合、二次障害というけれど、小・中学生にはないのであるか？

AHDHの生徒に、授業中何度もう注意をくり返して「何度言っただけか、もう七回も言ってるでよ」と怒っていらつしやる先生に反抗して、暴言や離席をくり返す生徒も、授業中にとび出してしまふ生徒も、すでに二次障害と言えるかもしれせん。小さい時から極度のこわがりや受動的だった子が、消極的であることも叱責されて不登校からひきこもりになってしまったというケースも、上手く支援が引きつがれてこなかったことによるものといえます。

チックや抜毛や自己否定や、子どもたちの内面の苦しきは様々な形でSOSとして私たちに訴えかけてきているのに、大人である私たちは何と鈍感なのだろうか。ライフステージごとの支援が必要であることはわかっているけれども現実には難しいと思ってしまう

るのでょうが、まず家族が理解者になりましよう。

ダウン症候群のお子さんや体の不自由さをもつ子ども達と比べて、体の発達を見ても知的発達を見ても定型発達の子との違いが分かりにくい発達障がいの子たちは、やはり理解されにくいのだらうと思います。

学校で見のがされやすいのは、LD(学習障害)や、ADD(不注意タイプの子) ASD(自閉スペクトラム症)の中でも受動的な子どもたちです。多動や衝動性のある子たちは、その行動ゆえに注目されがちです。しかしLDの子たちは、特に知的な遅れのないことから、努力不足だと思われがちです。アメリカ精神医学会の診断基準であるDSM-5によると、限極性学習症(SLD)と記述されていますが、幼児期に見えられにくいこの子どもたちは、入学直後から学習困難さを見つけてあげることが大切だと考えられています。つまり、国語と算数の学習のつまずきです。視空間認知に問題がある場合、ピント合わせがうまくいかず、読字障害が生じます。SLDに関して、鳥取大学が様々な取り組みをされてい

るのでょうが、まず家族が理解者になりましよう。

ソコン上でも検索できるようになっています。参考にされるといいでしよう。

不注意な子どもたちは、机の中がくしゃくしゃで整理ができず、忘れ物や失くし物も多く、朝の準備がなかなかできない等、生活面での問題も多いでしよう。家庭での課題として、本人に確認させることも幼少期のら身につけていくことが大事です。

受動型の子もたちは、お母さん達が「すぐ人見知り」とか「すごい恐がり」と感じておられたお子さんに多いように思います。皆の中で何とか一生けん命にがんばって行くのですが、ある時何かきっかけで気持ちがフツンと切れてしまうこともあります。「頑張り！」という励ましも逆効果になることもありますから要注意です。



・十一月のセンター親の会は九日(月)です。

※心配かけましたが、私は少しずつ歩けるようになり仕事にも復帰しつつあります。車の運転まであと少し!!